

中学校家庭科における家族教育の授業実践（Ⅱ）

多々納道子*・三島 香子**・井上富美子***

Michiko TATANO, Yoshiko MISHIMA and Fumiko INOUE

A Practical Study on Family Life Education in Home Economics at a Junior High School（Ⅱ）

〔キーワード：家族教育，性別役割分業意識，主夫，ディベート，新聞投稿〕

I. はじめに

今日の生涯学習社会における現代的課題の1つに、固定的な性別役割分業を見直し、男女共同参画社会を推進することがあげられる¹⁾。この課題解決には、社会と家庭生活の両方から取り組む必要がある。家庭科では、生徒の日々の暮らしの問題を多様な視点から問い直すことを目的にしているため、固定的な性別役割に関する問題についても効果的な学習ができるものと考えられる。

我々はこれまでに、家庭生活を通して生徒の固定的な考え方や行動様式を変革させるため、「家庭内における性別役割分業を考える」という主題のもとに授業研究を行ってきた。そこでは、家族が固定的な性別役割分業の実態にあり、それが問題行動の原因となっている家族を設定して、解決を目指す家族の話し合いの場面にロールプレイングを取り入れる、また主夫である保護者を学外講師として招いて授業を行った結果、生徒の固定的な考え方や行動様式を変革させるのに効果が認められた²⁾。

そこでさらに、本研究では内容の検討と共に、授業方法としてティームティーチング（以下、T・Tと称す）によるディベートを応用することにした。前回と同一の主夫である保護者を学外講師に招き、家庭科教員との組み合わせによるT・Tを展開することによって、より一層の学習効果を期待できるものと考えた。

また、家庭内の役割分業意識や実際の役割行動を変革させるには、生徒だけでなく生徒の家族の学習活動が不可欠である。そこで、家族を巻き込んで共に考えさせる

ため、一連の授業の中で、特にディベートによる授業は保護者参観日に設定した。

さらに、本題材では固定的な考え方からの脱却を目指し、授業を通して自分の考え方を形成し、それを発信して、他の人々と共有したり、違いを考えたりすることも目標の一つとしている。そのため、授業のまとめとして「私の考える未来の家庭像」を考え、新聞の読者欄「声」に投稿することを試みた授業研究を行ったので、結果を報告する。

II. 生徒の実態

学習前の生徒の家族や役割分業意識に関する実態を把握するため、家族状況、性別役割意識、生徒の家庭における仕事の分担状況、家庭のしつけについて調査した。

1 家族状況

まず家族構成をみると、生徒全体に占める拡大家族は35.5%、核家族は60.0%で、核家族が2倍近い比率であった。勤めている母親が57.5%、勤めていないが30.0%で、前回に比較して今回の対象では、その母親が働いている生徒の方が多かった。

2 性別役割分業意識

まず、授業前の生徒を全般的にとらえた性別役割分業意識を明らかにした。

表1に示すように、「男は仕事、女は家庭」という考え方に、男女とも「どちらかといえば反対」というものが最も多く、男子は50.0%、女子は38.9%であった。次に多いのが、男子は「どちらかといえば賛成」が27.4%

*島根大学教育学部家政教育研究室

**島根大学教育学部附属中学校

***島根県教育庁義務教育課指導主事

であるのに対して、女子では明確に「反対」というものが27.8%となっており、対照的な捉え方であった。このため、「賛成」と「どちらかといえば賛成」を合わせた賛成という割合は、男子が31.9%、女子では11.1%となった。逆に、「反対」と「どちらかといえば反対」を合わせると、男子は54.5%、女子では66.7%になり、女子よりも男子の方が固定的な性別役割分業意識に捉われる傾向がより強いといえる。

表1 授業前の生徒の性別役割意識(「男は仕事、女は家庭」という考え方について)

| | 人(%) | | |
|------------|-----------|----------|-----------|
| | 男子 | 女子 | 全体 |
| 賛成 | 1 (4.5) | 0 (0) | 1 (2.5) |
| どちらかといえば賛成 | 6 (27.4) | 2 (11.1) | 8 (20.0) |
| どちらかといえば反対 | 11 (50.0) | 7 (38.9) | 18 (45.0) |
| 反対 | 1 (4.5) | 5 (27.8) | 6 (15.0) |
| わからない | 3 (13.6) | 4 (22.2) | 7 (17.5) |

次に、学校や家族生活の具体的な領域での男女の役割、適性能力のとらえ方を表2からみよう。

表2 男女の適性能力の理解

| | 男子 | | | 女子 | | |
|---------|----------|-----------|-----------|----------|-----------|-----------|
| | 男性 | 男女両方 | 女性 | 男性 | 男女両方 | 女性 |
| 家の代表 | 8 (36.4) | 13 (59.1) | 1 (4.5) | 7 (38.9) | 11 (51.1) | 0 (0) |
| 生徒会長 | 5 (22.7) | 17 (77.3) | 0 (0) | 1 (5.6) | 17 (94.4) | 0 (0) |
| 家族の食事作り | 0 (0) | 12 (54.5) | 10 (45.5) | 0 (0) | 7 (38.9) | 11 (61.1) |
| スポーツが得意 | 6 (27.3) | 16 (72.7) | 0 (0) | 5 (27.8) | 13 (72.2) | 0 (0) |
| 料理が得意 | 1 (4.5) | 10 (45.5) | 11 (50.0) | 0 (0) | 7 (38.9) | 11 (61.1) |

「家の代表」「生徒会長」「家族の食事作り」をそれぞれ男女いずれの役割と捉えるかに関してみると、「家の代表」は、「男女両方」とするものが過半数を占めて最も多く、次が「男子」で、「女子」の役割とするものは男子では極めて少なく、女子は皆無であった。「生徒会長」も同様に、「男女両方」の役割とみなすものが男子は約3/4、女子では90%以上を占めて最も多かった。次は「男子」の役割ととらえるもので、男子は約1/4、女子では約6%と極めて少なく、男女差が顕著であった。

このように、「男女両方」とするものが最も多いものの、その次が「女子」よりも「男子」であり、ここに伝統的な性別役割分業意識の存在が明確に表現されているといえる。

「家族の食事作り」については、男子は「男女両方」の役割とするものが最も多いものの、「女子」の役割とするものとの間で大差なかった。これに対し、女子は「女子」の役割とするものと「男女両方」の役割とするもの

とが6:4の割合であった。「男子」の役割というのは、男女とも一人もなかった。

家庭の仕事の役割分担に関しては、一般的に女子の方が女子への役割期待を強く内面化する傾向のあることが明らかにされている³⁾が、本調査でも同様に「女子」の役割とみなすものの方が多く、男女が共に担うという意識改革の必要性を示唆した。

「スポーツが得意」なのは、男女とも約3/4が「男女両方」、「男子」とするのが約1/4と、捉え方が極めて類似していた。「料理が得意」では、男女とも「女子」とみなすものの方が約半数を占めて多く、家族生活に関わる性別役割分業の捉え方には男女差があった。

以上のように、学校や家族生活、スポーツにおける男女の適性能力を尋ねたところ、家族生活に関しては、男女とも「女子」と捉える傾向にあるが、女子の方がより一層顕著であるので、男女がともに学ぶ家庭科において、このような捉え方を改革するよう、性差を踏まえた指導方法を工夫することが課題となる。

3 家庭の仕事の分担状況

家族における役割分担の実態は、生徒が役割分担のあり方を理解する際に1つのモデルになっている。そこで、生徒の家庭における家族員の役割分担状況を求め、それを「女子中心型」「男女共業型」「男子中心型」の3つに分類したところ、表3のような結果を得た。

「衣生活の仕事」「食生活の仕事」「住生活の仕事」及び「買い物」については、母、祖母や女子生徒など女子がほとんどを担っていた。これに対し、「家族に関する仕事」は男女共にする場合が多く、「地域に関する仕事」は「男女共業型」が最も多いものの、「女子中心型」と「男子中心型」との差異はあまりなかった。

今日においてもこのように衣・食・住に関する仕事のほとんどが、「女子中心型」でなされているということは、依然として生徒達が家庭の仕事は女子が担うという考え方を、引き継ぐ環境にあるということを示している。

表3 生徒の家庭における仕事の分担状況

| | 女子中心型 | 男女共業型 | 男子中心型 | その他 |
|-----------|-----------|-----------|-----------|---------|
| 衣生活に関すること | 34 (85.0) | 5 (12.5) | 0 (0) | 1 (2.5) |
| 食生活に関すること | 31 (77.5) | 8 (20.0) | 0 (0) | 1 (2.5) |
| 住生活に関すること | 23 (57.5) | 14 (35.0) | 2 (5.0) | 1 (2.5) |
| 家族に関すること | 14 (35.0) | 22 (55.0) | 1 (2.5) | 1 (2.5) |
| 買い物 | 30 (75.0) | 9 (22.5) | 0 (0) | 3 (7.5) |
| 地域のこと | 12 (30.0) | 15 (37.5) | 12 (30.0) | 1 (2.5) |

4 家庭のしつけ

家族からの性別しつけの実態を明らかにするため、まず「男の子だから」「女の子だから」と言われるか否かについて調査した。

その結果、「たまに言われる」という男子が59.2%、女子は38.9%と最も多くを占めた。次いで男子は、「全然言われない」が22.7%であるのに対し、女子では「時々言われる」が22.2%と「全然言われない」と同じ割合であった。加えて「とてもよく言われる」は、男子が4.5%とそれほど大きな割合ではないが、女子が男子よりも3倍以上を占め、全般的に女子は、性別しつけを強く受けている傾向が明らかになった。

「家庭の仕事を手伝いなさい」については、男女とも「たまに言われる」が最も多いが、性差はそれほど顕著ではなかった。

このように、家庭の仕事の分担に関しては、性別しつけはそれほど強固とはいえないが、「男の子だから」「女の子だから」に関しては、女子の方に強調されており、家庭では依然として性差にとらわれたしつけがなされていると考えられる。

<第1次>

中嶋さんとの出会い

(1) 目標

1. 中嶋さんの生き方に関心を持ってビデオを視聴したり、質問をしたりすることができる。
2. 自分の中のジェンダーに対する意識に気づくことができる。

(2) 展開

| 学習活動 | 授業上の留意点 | 備考 |
|------------------------------|---|--------------------------|
| ◆ジェンダーに対する自分の意識を知る。 | ・ジェンダーチェックをさせる。 ・ジェンダーとは、社会的に作られた性差であることを説明する。 | TBS「上岡龍太郎がズバリ〜ご夫婦スペシャル〜」 |
| ◆家事を主に分担している男性(主夫)の生活の様子を知る。 | ・「主夫」の生活を具体的に知らせるためにビデオを視聴させる。 | |
| ◆ビデオを見た感想を書く。 | ・ワークシートに記入させる。 ビデオを見た感想 中嶋さんへの質問 | |
| ◆中嶋さんに質問をする。 | ・中嶋さんを生徒に紹介し、質問をさせる。 | |

Ⅲ. 授業実践

1 対象：島根大学教育学部附属中学校1年の2学級、男子21人、女子19人の計40人。各学級は、半学級編成である。

2 授業日時：1998年11月25日～12月19日。

3 授業者：三島香子

4 授業計画

単元名：「これからの家庭生活を考えよう」

第1次 中嶋さんとの出会い…………… 2時間

第2次 「男は仕事、女は家庭」の考え方にあなたは、賛成ですか？反対ですか？（討論学習）…………… 2時間

第3次 わたしの未来の家庭像を描く（新聞投稿）…………… 2時間

5 授業目標

- (1) 家庭内の仕事の分担と固定的な性別役割意識との関連を理解することができる。
- (2) 一人ひとりが自己実現を可能とする家庭生活のあり方について考えることができる。
- (3) 自分の考えを持ち、発表することができる。

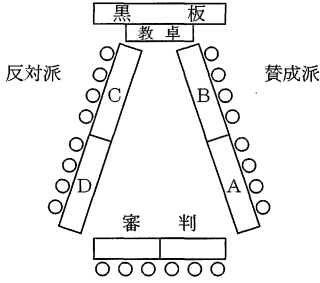
<第2次>

「男は仕事、女は家庭」の考え方にあなたは賛成ですか、反対ですか？

(1) 目標

1. 自分の立場の意見を相手にわかりやすく説明することができる。
2. 他のグループの発表を聞き、それに対して意見を持つことができる。
3. グループで協力して討論を行うことができる。

(2) 展開

| 学習活動 | 指導上の留意点 | 備考 |
|--|---|--|
| <p>◆デベートによって家庭の仕事の分担について考えよう。</p> <p>◆グループごとに立論をまとめよう。</p> <p>◆デベートをしよう。</p> <p>◆今日の学習でどんなことを感じましたか。</p> | <p>・本時の課題を知る。</p> <p>・グループで話し合って立論をまとめよう。</p> <p>・デベートを行う。</p> <p>テーマ 「男は仕事、女は家庭」</p> <p>①立論（2分×4） ②相手への質問・反論（2分×4） ③作戦タイム（5分） ④応答（2分×4） ⑤審判による判定（5分）</p>  <p>・デベートを終えた感想をワークシートに記入する。</p> | <p>グループを回って話し合いの状況を把握し、不十分な点は助言を与える。</p> <p>公平な討論を行うためにルールを守ることが大切であることを説明する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・時間を守る。 ・大きな声でゆっくりと話す。 ・友達が話しているときに私語をしない。 <p>不適切な発言や態度がみられた場合には、その都度助言する。</p> <p>教師、講師からも感想を述べ、いろいろな視点から物事を考えることの大切さに触れる。</p> |

<第3次>

未来の家庭像を描こう

(1) 目標

1. 性別役割分業意識にとらわれない未来の家庭生活を考えようとする事ができる。
2. 自分の意見をまとめ、表現することができる。

(2) 展開

| 学習活動 | 授業上の留意点 | 備考 |
|-------------------------------------|---|----------------------------------|
| ◆新聞への投稿を読む。 | | 「主夫願望は逃避の妄想か」～朝日新聞 1998.11.30 |
| ◆自分なら将来、どのような家庭生活を送りたいかを考え、文章にまとめる。 | ・書きにくい生徒には、投稿者への返事もよいことを伝える。 ・原稿用紙だと本音が出にくいので、野線の入った用紙を配る。 | |
| ◆新聞社へ投稿する。(課外) | ・教員がまとめて投稿する。 | |

IV. 授業の流れと留意点

1 第1次

- (1) われわれが家庭生活を営むには、どんな仕事が必要か。
- (2) 現代家族の役割分担の実態。
- (3) ジェンダーチェック。
- (4) 保護者で「主夫」をしている中嶋春喜さんとの出会い。(ビデオ上で)中嶋さんの1日の生活の様子をビデオ視聴によって理解する。
- (5) 中嶋さんの生活の様子と考え方についての感想と質問があれば記す。
- (6) 中嶋さんと生徒とが対話する。(中嶋さんと生徒の実際のお会い)
- ①家庭の仕事より、勉強をがんばろうと思ったことはありますか？
- ②男の人がした方が都合の良い家庭の仕事はありますか？
- ③料理雑誌を見ますか？
- ④主夫していて恥ずかしかったことはありますか？
- ⑤ずっと主夫を続けますか？

中嶋さんの生活の様子をビデオ視聴した感想と質問例

(感想)私は主夫というのがあるのを初めて知りました。そう思ったのも家の仕事は全て女性の仕事だと思っていたからです。でも、男性にはそんなことあまり長続きしないだろうと思っていたけど、男性の意外な面を知りました。

おくさんもふつうの家族とはちょっと違ったかんじがするのでよかったです。こういう家族は今ほめずらしいけれど、10年後、20年後私たちが結こんする頃になれば、あたりまえのことになっていけばいいなと思いました。

(質問)ずっと主夫を続けますか？

難しい資格試験を20回も不合格したのにはびっくりしました。でも、私は「ただいまー」と帰ったら、お父さんがせんたくものかたたんてで、「おかえりー」とかいてもらうのもけっこういいかなと思いました。このままずっと不合格でというのは失礼かもしれないけれど、主夫を守りつけて下さい。

生徒の多くは、男女平等を理解しているように見えるが、これまでの研究⁴⁾や事前調査から明らかのように、学校や家族生活の具体的な領域になると、必ずしも十分とはいえない。そこで、生徒の固定的な意識にゆさぶりをかけることを目的として、自分は男らしさ、女らしさにとらわれているか否かを明らかにするジェンダーチェックを行ったり、父親である「主夫」の存在を知らせ

ることとした。ジェンダーとは、文化的・社会的につくられた性差をあらわす言葉であり⁵⁾、ジェンダーチェックはこのように文化的・社会的に作られた男らしさ、女しさへのこだわりを調べる調査のことである。今回の授業研究では、東京女性財団の作成した中・高校生用のジェンダーチェック⁶⁾を参考にした。

「はい」に○をつけた数は、男子が平均2.7、女子は2.1であった。このジェンダーチェックの結果から判断して、男子の方が依然として固定的な考え方にとらわれている傾向にあることが理解できた。また、「はい」の数は、男子が0から7までの範囲に分散しているのに対して、女子では0から4までに過ぎず、個人差が大きいのも男子といえる。

2 第2次

(1) ディベートの準備

テーマ「男は仕事、女は家庭」

テーマについて前もって賛否を尋ね、賛成派A、B班と反対派C、D班の計4班を作り、グループごとになぜそう思うのかなどをまとめ、ディベートの準備をする。ディベートの進め方、ルールを理解する。

ディベートとは、ルールのある知的論争あるいは言葉のボクシングとも言われ、日本人が苦手する論理的思考

や論理的に表現するといういわゆる論理的能力を育成することを目的としている⁷⁾。このディベートを進めるにあたっては、①ある一つの論題をめぐって行う、②相対する2組の間で行う、③一定のルールに従って行う、④議論は断定ではなく、立証されたものでなければならない、⑤最後に何らかの形で勝敗が決定されるというように、一定のルールやフォーマットがある。

本授業では、学級の人数やディベートに当てることのできる時間、ディベートのしやすさなどを考慮し、チームディベートとした。すなわち、学級を「男は仕事、女は家庭」という考え方に、賛成と反対の各2班ずつと勝敗を決定する審判の計5班に分けた。

本来、班分けは自分自身の考え方にこだわらず、機械的になされるものである。しかし、対象とする中学1年では、考えたこともない立場で論争をするのは難しいのではないかという判断のもとに、事前に「男は仕事、女は家庭」についての生徒の考え方を自由記述させ、概ねそれによって班分けをした。

また、賛成派と反対派の各2班を順番に進行させることにし、フォーマットについても、第2次の指導案に示したように、ディベート本来の機能を失わない程度に簡略化した。

資料2 あなたの学校生活と心の内のジェンダーチェック

「男らしさ」「女らしさ」のとらえ方を測ってみよう

「はい」か「いいえ」に○をつけてください。

はい いいえ

- | | |
|---|---------|
| (1) 役割を決める時、男子が班長、女子が副班長になった方が良い。 | () () |
| (2) そうじの分担をする時、男子が力仕事、女子がこまかい仕事をする方がよい。 | () () |
| (3) 女子はおとなしくて、ひかえめなのが良い。 | () () |
| (4) 男子は活発で、はきはきしているほうがよい。 | () () |
| (5) 泣くのは男らしくない。 | () () |
| (6) 口ごたえするのは女らしくない。 | () () |
| (7) スポーツで男子が女子に負けるのはみっともない。 | () () |
| (8) 男子の方が女子より料理が上手なのは変だ。 | () () |
| (9) 女子は将来家庭に入るのであまり勉強をしなくても良い。 | () () |
| (10) 大事なことは男子が責任を取らなければならない。 | () () |

「はい」の数をかぞえましょう

「はい」の数が多い人ほど、あなたの学校生活や心の中は、「男らしさ」「女らしさ」にしばられているといえます。

さらに、立論をまとめるための参考資料は、ある程度教員側で準備した。

事前の生徒の考え方は、次のようにまとめられた。

賛成派は、世間一般に数の上からみると多数派である性による役割を明確にした分担方法を肯定的に捉えていた。しかも、家族の重要な機能である愛情は、女性から男性へという一方通行の営みとして捉えていることが伺えた。具体的な領域でみると、例えば働く女性の当然の権利である産休についても、女性が働く会社に迷惑をかけるというように、誤った理解さえしていることが明らかとなった。

反対派では、固定的な性別役割分担の状況においては女性に不利であるとか、男女一律の平等論を述べる等、偏った理解をしていることが明らかであった。

したがって、現実の諸問題を生きた教材として取り上げ、その科学的な解明を通して、固定的な考え方の変革に迫ることが重要だと考えられる。

(賛成派)

- ・世間に目を向けると、主夫より主婦のほうが多く、家庭内の仕事の多くは、女性がやっている。
- ・昔から男は外で働いて、女は家の中で食事の用意や子供の世話をしている。
- ・女が働くことと産休を取ることで、会社に迷惑をかけることになる。
- ・男は力があるから仕事ができるし、女は器用だからそれを利用して家事をする。
- ・男は家に帰ったら奥さんから「おかえり」って言ってほしいと思う。

資料3

ディベートのルール

公平なディベートを行うためのルール

①時間厳守。

タイムキーパーが三〇秒前の声と五秒前から秒読み。途中で時間も時間になったら終わり。

②発言はゆっくり、大きな声でいう。

③意見を言っているときには私語厳禁。

④ディベートでは実際の自分の考えとは無関係に立場が決められる。

そこで立場と異なる個人的意見、例えば賛成派の立場の人が「自分は個人的には反対だ」と言うのはルール違反となる。

また立場と矛盾する誘導的な質問、例えば反対派の立場の人に「あなたは個人的にはどう思うか」という質問はルール違反となる。

(反対派)

- ・男の人ばかり自分のやりたいことをやって、女の人が家事を押しつけられるなんて、不公平だと思う。
- ・現代は女性差別をなくそうとしているから、どちらがやってもいい。
- ・女性のほうが仕事が上手かもしれないし、男性のほうが家事が上手かもしれないので、上手なほうが伸ばしていった方がいいと思う。
- ・一人暮らしをするためにはどちらも必要である。

(2) ディベート開始

三島香子が適宜助言を与え、中嶋さんにはタイムキーパーを務めてもらった。

生徒達のディベートへの取り組みは、大変意欲的で、立論、相手への質問・反論、応答のいずれも終始白熱していた。多面的に問題を捉えようとする姿勢がみられ、相手への有効な反論を試みるなど、ディベートにおいて育成することを目的とした能力を発揮していた。また、勝敗にこだわるのではないかと案じたが、ゲーム感覚で議論を楽しんでいることが伺えた。

(3) 審判の判定

- A (賛成派) : 男の体力や収入にこだわっていた。声が小さい。まあまあの説得力。
- B (賛成派) : 昔からということが多かった。説得力あまりない。応答がない。
- C (反対派) : はっきりした言葉使い。共働きの家庭を例にしていた。声は良い。説得力あり。応答には偏りがみられた。
- D (反対派) : まあまあの説得力。声は良い。わかりにくい。

結果は、C、Dが2票ずつで同点で、「男は仕事、女は家庭」に反対する班が勝ちとなった。

3 第3次 未来の家庭像を描こう

(1) ディベートの感想

(2) 世界における男女の役割分担と「わたしの未来の家庭像」

「男は仕事、女は家庭」という考え方は、必ずしも世界共通ではなく、逆転しているところもあることを補足する。文化もジェンダーも変化するものである。

- (8) ディベートとかやって、私の気持ちが変わるごいたり、固まったり、不安定だったけど、中嶋さんの話はすごくわかりやすく、私が主婦で中嶋さんと世間話でもしたらすごくいいなと思いました。(女子)
- (9) 「これからの家庭生活を考えよう」という学習(ディベート)をして、「男は仕事、女は家庭」の考え方がふらついている。でもやっぱり反対かな。でもとてもおもしろいディベートでした。(女子)
- (10) 男女の役割についてなんて、今まで特に考えたことがなかった私ですが、中嶋さんと出逢ったことやディベートをしたりしたことで、自分の考えをしっかりとるようになったのではないかと思います。(女子)
- (11) 私は家庭生活を考えてやっぱり男女共両方が家庭の仕事をしたほうがいいと思いました。ディベート

である。

2 学習意欲

今回の家族に関する学習において、生徒達が意欲を持って取り組んだか否か、学習意欲について調査した。

学習意欲としては、(1) 学習題材への興味、(2) 学習内容と方法への理解、(3) 学習仲間への所属性という3つの観点から調査した。

これらの中で特に高いのが、「学習したことが理解できた」とするもので、男女全員であった。「楽しく取り組めた」と「友達と協力できた」というものも、90%～100%の範囲内にあり、学習内容と方法への理解、学習仲間への所属性という面では、極めて高い達成であった。しかし、「このような学習をもっとやりたい」というものは、男女とも70%台にとどまっていた。したがって、学習題材に関しては、生徒がさらに意欲を持って取り組めるような工夫が必要となる。

表4 学習意欲（はいと答えた割合）

(%)

| | 男子 | 女子 | 全体 |
|------------------|-------|-------|-------|
| 楽しく取り組めたか | 91.0 | 94.4 | 92.5 |
| 学習したことが理解できたか | 100.0 | 100.0 | 100.0 |
| このような学習をもっとやりたいか | 72.2 | 72.2 | 72.2 |
| 友達と協力できたか | 95.5 | 100.0 | 97.5 |

で話しあったけれど、「男は仕事、女は家庭」というのは変だと思いました。(女子)

- (12) ディベートはよく分からなかった。でも主婦だけでなく主夫がおられるにはびっくりしました。(女子)

回答者は男子5人、女子7人であった。

まず、ディベートは学習方法として「楽しい、おもしろい」というのが4人、「いろんな考えや意見があることがわかった」「自分の考えをしっかりとるようになった」というように、具体的に学習効果を指摘しているものが5人であった。さらに、「自分の考えにゆさぶりをかけられた」「気持ちがゆれ動いたり、固まったり、不安定であった」というものが4人であった。

このようにディベートによって、まさに本授業の目的の一つである固定的な考え方にゆさぶりをかけることを達成していることが伺え、「これからの家庭生活を考えよう」という内容と、ディベートという方法の組み合わせは適切だといえる。

ただ、ディベートは「よく分からなかった」というものが1人あり、具体的な学習活動を通してディベートという方法を理解できるようにさらに工夫することが必要

3 家庭の仕事の分担意識

授業後に、今後家庭の仕事をどのように分担するかを尋ねたところ、男女とも「今よりもっとする方がよい」と「今の程度でよい」とがほぼ6:4の比率であった。今回の固定的な性別役割分業意識を見直す学習によって、家庭の仕事を分担することを触発されたものと考えられる。

4 授業後の性別役割意識

授業によって性別役割意識がどのように変化したかを見ると、男子は「どちらかといえば賛成」が約3/1、「どちらかといえば反対」が半数近くに減少し、その分明確に「反対」というものが、4.5%から28.6%と大幅に増加した。同時に、「わからない」というものが約2倍に増加し、ディベートによってゆさぶりをかけられたことが影響しているものと考えられる。女子については、「わからない」が半分減少し、「反対」もやや減少した。その分、「どちらかといえば反対」が38.9%から55.6%に増加した。

以上のように、男女とも学習によって固定的な性別役割意識に変革がみられ、体系的な学習を行うことが重要であることが理解できた。

表5 授業後の性別役割意識（「男は仕事、女は家庭」という考え方について

| | 人 (%) | | |
|------------|----------|-----------|-----------|
| | 男子 | 女子 | 全体 |
| 賛成 | 1 (4.5) | 0 (0) | 1 (2.5) |
| どちらかといえば賛成 | 2 (9.1) | 2 (11.1) | 4 (10.0) |
| どちらかといえば反対 | 7 (31.8) | 10 (55.6) | 17 (42.5) |
| 反対 | 6 (28.6) | 4 (22.2) | 10 (10.0) |
| わからない | 6 (28.6) | 2 (11.1) | 8 (20.0) |

5 新聞への投稿文「わたしの未来の家庭像」

生徒40人の「わたしの未来の家庭像」を投稿したところ、「料理が作れる男になりたい」と題するものが新聞掲載された。全国誌であったので、男性のための料理の本が送られてきたり、感想がよせられたりと、全国からの反響があった。そのほとんどが考え方に賛同するものであった。また、今回の投稿文への読者からの感想や意見が掲載されたり、「主夫願望は逃避の妄想か」と題する当初の投稿文が掲載されて以降、新聞紙上で起こされたちょっとした「主夫論争」に一石を投じるものになった。

全員の投稿文を掲載できないので、新聞への投稿文「わたしの未来の家庭像」から、夫と妻の役割をどのようにとらえているのかをみてみよう。

未来の家庭において、妻である自分が専業主婦になりたいという女子が21％、その他は是非希望する職業があると具体的な職業名をあげていたり、とにかく仕事したいというもので占められた。男子は、職業に従事するということが前提にあり、妻には家庭にいてもらいたいという男子が24％で、他は妻と協力するというものであった。

10人の生徒の投稿文を記す。

- (1) わたしの未来の家庭像は、自由に外で働いて、子どもがいるなら、外の仕事と家庭の仕事を両立したいと思っています。相手の人が外で働きたいのなら、外で働いてくれればいいと思うし、家庭での仕事をしたというのなら、子どものことは半分以上はまかせればよいと思います。……きっと大変だと思うけど、2人で協力していけばよいと思います。仕事の役割というの、世間の考えで成り立たせるのではなく、2人で考えていくものだと思います。(女子)
- (2) 私が将来結婚したら2人で働いて、2人で家事をしていきたい。私の夢は獣医だ。結婚して仕事をやめるってことはたぶん絶対はないと思う。もし、そうなってしまったら、とても仕事への思いが強すぎ

て家事もちゃんとできないし、仕事もできなくてすぐ中途半端になってしまうと思う。……私の考えている将来の生活は、現実厳しいのであまりこともかもしれないけれど、それでも私はそうしていきたい。(女子)

- (3) 私は、大人になって勉強してお医者さんになれたら、病気で苦しんでいる世界中の子ども達を助けてあげたいと思っています。どんなことがあっても、この夢にむかってがんばりたいと思います。だから、結婚したとしても「専業主婦」にはなりたくないです。……女性が家庭にしばられていては、いつまでたっても日本では「男女差別」はなくなるんじゃないかな、いつまでもこのままでいいのかな、私はそう思います。

やっぱり、結婚しても男性も女性も夢をかなえられるように、家庭の仕事だって分担して協力してやらなくてはだめだと思います。今の考え方はそうすぐ変わらないでしょうが、それを変えていくことが私の第二の夢になりつつあります。早く「男女平等」の世の中になることを願って。(女子)

- (4) 私は将来結婚して家庭を持っても、家庭の仕事ばかりするのではなく、働きたいと思います。でも、現在は「男は仕事、女は家庭」という考え方が強いと思います。

でも私は、そういう考え方にとらわれず、女の人が働きたかったら働き、男の人が家庭の仕事をしたかったらしてもよいと思います。もし、両方とも働きたいということになれば、共働きをして、家庭の仕事二人で協力して行えばいいと思います。(女子)

- (5) 私はやっぱり大人になったら、家庭に入りたいです。でも「男は仕事、女は家庭」ということに関しては、どっちかというと反対です。人はそれぞれ違うから、別に女の人が仕事をして、男の人が家庭に入ったって、自分がそれでいいならいいと思います。……「男は仕事、女は家庭」と決めることは、良いことではありません。自分の未来は、自分の好きなように決めればいいのではないかと思います。(女子)

- (6) 昔から、「男は仕事、女は家庭」という考え方がありますが、ぼくの未来の家庭像はちがいます。ちがうといっても「男は仕事、女は家庭」に決めつけるのはよくないという意味です。ぼくは良く話し合っって決めないといけないのではないかと思います。

つまり、ぼくの未来の家庭像は「仕事と家庭は話し合いで」と感じます。(男子)

(7) ぼくは、この前までは家庭や仕事のことに興味はありませんでした。でも学校の家庭科の時間に「男は仕事、女は家庭」という考えについてディベートをして、そのことを考えるようになりました。ぼくはどちらかというとこの考え方には反対でした。ぼくの夢は学者になるということで、将来結婚したら、家庭のことはおくと話し合っただけで分担してやりたいです。これがぼくの未来の家庭像です。

(男子)

(8) ぼくの未来の家庭はやっぱり女性が家にいてほしいと思う。ぼくは親が二人とも働いていてさびしい思いをしたから、ぼくと同じ思いを子どもにさせたくないから。でも、今は女性も社会にどんどん出ていく時代だから、ぼくの考えている家庭は実現しないと思う。だから自分よりも女性の方が仕事が好きだったら、自分が早く帰る、子どもの世話をしたいと思う。でも、女性もかじをしたり、家庭の仕事を女性と分けたいと思う。(男子)

(9) ぼくの将来の理想の家庭は、「男は仕事、女は家庭」です。なぜなら、自分の家庭や社会的にもそういう現実だからです。それに、自分には将来新幹線の運転手になるという夢があるからです。もし、自分が主夫をやりながら、運転手をやることになったら、それはほとんど無理だと思います。……ぼくには、夢があるので、自分の家庭は「男は仕事、女は家庭」ということを基礎にして、お互いに協力して良い家庭を築きたいです。(男子)

(10) ぼくは家庭をもつなら仕事は自分がやっても、どちらがやってもよいと思うけど、やっぱり自分は仕事がしたいです。……家庭をもつということはまだまだ先のことだから、よくは分からないけれど、自分もそして自分もつ家族も納得をしてそして家族全員が幸せになるように、男だから、女だからという考えを捨てていきたいです。(男子)

以上生徒たちの考えにみられるように、自分の将来の生き方や職業を考えた末に、どのように役割分担ができるのか、したいのかを考えていた。その際には、現在の考え方や実態を批判的にとらえながら、そこから脱却できないものが多くみられた。したがって、われわれが望むライフスタイルを実現できるように、社会的支援や仕組みを変える必要があるというような、社会的視点をとり入れた題材の導入を検討することが重要になる。

6 保護者の感想

2次のディベートを取り入れた授業を保護者参観日に行ったところ、該当する20人中、7人の母親の参観があった。授業を参観した感想を求めたところ、4人から次のような感想が寄せられた。

(1) このような形式の授業を初めて見せていただきました。賛成派も反対派もなかなかはっきりしていて、頼もしく思いました。三島先生同様、意見を言いたくなるような場面がありましたが、楽しく見せていただきました。

ちなみに、私は息子ともども反対派です。

(2) とても楽しい授業でした。男女差別のこと介護のことなど、今の世の中がかかえている課題について意見を述べる姿もあり感心しました。

(3) 私自身が核家族、共働きで3人の子育てをしていますので、とても興味のあるテーマでした。自分の体験の中で仕事、家庭と考える時、矛盾や喜びを感じています。これからの子供たちが生き生きとお互いに認め合いながら、歩んでほしいと思います。限られた時間で残念です。続きが聞きたいと思います。

(4) とてもおもしろい授業でしたが、時間が短くてゆっくり考える時間がないように思いました。

もっと互いの反論が聞きたかったように思います。意外に古い考えの子供さんがいてびっくりです。

以上のように、母親だけの参観者であったが、いずれも今回の授業を好意的に捉えていた。授業参観をし、さらに授業の感想を寄せるというのは、このような性別役割意識に関わる問題に高い関心を持っていることが伺え、今後保護者同士で、家族の中で話題になり、話し合いが持たれることを期待したい。

V. まとめ

家庭生活における性別役割分業を見直すため、家庭生活領域の家族の役割に関わって授業研究を行った。本研究では授業方法として、「主夫」である保護者を学外講師として招き、家庭科教員とのT・Tによるディベート学習を通して生徒それぞれが考えた「わたしの未来の家庭像」を、新聞に投稿するなどの工夫をした。

その結果、今回の授業については非常に意欲的に取り組み、授業内容についても理解できたとするものが大部分であった。ディベートでは友達との協力関係が重要であるが、それも十分出来たというものが多く、固定的な性別役割を見なおすという授業においては、ディベート

は有効な方法といえる。固定的な捉え方の強い男子では、意識を変革するのに今回の授業は有効であった。

今後、さらに内容や方法に検討を加え、有効な授業を工夫していきたい。

参考文献

- 1) 生涯学習審議会答申 「今後の社会の動向に対応した生涯学習の振興方策について」(1992)
- 2) 多々納道子, 三島香子 「中学校家庭科における家族教育の授業実践—家庭内における性別役割分業を考える—」, 島根大学教育学部附属教育実践研究指導センター紀要第8巻(1997) pp.107~119
- 3) 中西祐子 『ジェンダー・トラック』, 東洋館出版(1998), pp.43~45
- 4) 井上輝子, 江原由美子 『女性のデータブック第2版』有斐閣, (1995), pp.136~138
- 5) 藤田英典 「教育における性差と文化」東京大学公開講座『性差と文化』, 東京大学出版(1996) p.256
- 6) 東京女性財団編 『ジェンダーチェック 男女平等への指針 中学・高校生編』, (1997) pp. 4~7
- 7) 魚住忠久編著 『ディベート学習の考え方「・進め方」』, 黎明書房(1997) pp. 8~37